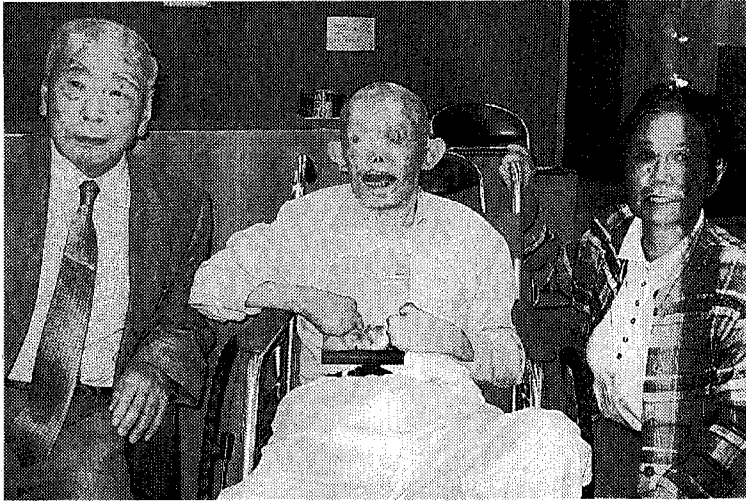


病と故郷歌い上げた

盲目の詩人、桜井哲夫さん(81)が、写真詩集「津軽の声が聞こえる」の英訳版「THE CALL OF TSUGARU」を出版した。故郷の青森・津軽の情景と、ハンセン病を患った我が身とを歌い上げた。「世界中の人々に病のこと、津軽のことを伝えたい」という願いがこめられた1冊だ。

青森出身・桜井さん



写真詩集の英訳版を出版した桜井哲夫さん(中央)。詩の指導をしてきた斎田朋雄さん(左)と、支援者の元看護師、赤尾拓子さん(右)県庁で

「世界に伝えたい」詩集の英語訳出版

桜井さんは大正の終わり、青森県鶴田町のリンゴ農家に生まれた。ハンセン病の発病がわかり、17歳で草津町の栗生葉泉園に入園。以来、ずっとこの地で暮らす。園で知り合った高崎市出身の妻と結婚し、子どもも授かったが、墮胎させられ、その妻も白血病で若くして亡くなった。

詩作を始めたのは、もう60歳近くになってから。入園した時分に短歌をたしなんだが、29歳で失明してからは中断。同園に

詩画会が出来て、再び詩作に挑んだ。

看護婦さあーん

入れ歯が逃げたよ

枯葉と一緒に入れ歯が逃げた (中略)

たまには入れ歯よ

お前の好きな物だけ食べるがいい

入れ歯よ

夕食の時間までには帰って来いよ

(「入れ歯が逃げた」)

桜井さんを指導する「西毛文学」主宰の詩人、斎田朋雄さん(91)は「人間性が濃厚で、エネルギッシュだ。そして非常に分かりやすい」と作風を表現する。

頭の中で「書きためた

詩を、代筆者の手を借り

精神的に作品に仕上げ

る。88年の「津軽の子守

唄」を皮切りに、次々と詩

集を出した。勉強熱心さ

は突出していて、詩作を

初めて間もなくクリスマス

ヤンになったのも聖書や

賛美歌を身近なものにし

「口語体の詩の韻を知り

たいという不純な動機な

んです」と、ちやめっ気

たっぷり。

齢を重ね、幼少を過ご

した津軽への想いは、幾

度も帰郷を経て一層強

まる。桜井さんに共鳴し

た写真家・鏑山英次さん

が撮影した故郷の風景に

添え、昨年出版した詩集

の英訳には、同じ出版元

のウインズ出版社が協力

した。1200円。1千

部を刷った。「ローマ法

王に渡したいんです」。

恩返しも込めてか、桜井

さんは語る。